

- 口の中で、不思議の国のアリスの一節を復唱していた。まさにボス猫はそういう消え方をし——チェシャ・キャット!
- 
- p. 114
- 2054 泡坂妻夫『トリック交響曲』（文藝春秋, 1985年, 文春文庫）
- 
- 日本語の表記法は漢字仮名混じりで、この表記法は文字遊びをするとき、最も都合がよいように思う。少なくとも英語などより、はるかにバラエティーに富んでいる。ルイス キャロルなどが知ったら、日本人に生まれなかったのを、ずいぶん口惜しがっただろうと思う。
- 
- p. 146
- 2055 安野光雅『空想工房』（文藝春秋, 1986年, 文春文庫）
- 
- この国はトランプの国なのです。ちょうど百年前でした。一度あなたと同じ人間がみえたことがあります。ルイス・キャロルという方です。うさぎの穴におちて亡くなりましたが……おいしいことをいたしました。キャロルさんは、私たちの国の内乱をしずめてくださった恩人なのです。
- 
- p. 136
- 2056 安野光雅・森毅『対談数学大明神』（新潮社, 1986年, 新潮文庫）
- 
- ぼくは「アリス・コンプレックス」と名づけているんだけど、鏡のなかの自分と一体化したいという欲求があって、向う側へ入っていったときにどうなるか、考えてしまうんだな。
- 
- p. 131
- 2057 小栗虫太郎「二十世紀鉄仮面」（小栗虫太郎『青い鷲 小栗虫太郎傑作選Ⅲ』（社会思想社, 1976年, 現代教養文庫）p. 5-257）
- 
- と、第一章「<sup>ダウン-セ-ラピット-ホール</sup>兎の穴へ」の最初の頁を開くと、そこには、次の数行に
- <sup>ページ</sup>  
傍線 <sup>アンダーライン</sup> がしてあった。
- それには、<sup>オレンジ-マーメレード</sup>「橙の砂糖煮」と書いてありましたが、<sup>なみ</sup>内容は空でした。彼女は
- <sup>びん</sup>その瓶を、もし落したら、だれか下にいるものを殺しはせぬかと気遣われたので、そっと、下へ落ちてゆくとき、棚のうえに載せておきました。
- 
- p. 237
- 2058 長田弘『散歩する精神』（岩波書店, 1991年）
- 
- ブージャムという言葉は、ルイス・キャロルの『スナーク狩り』にでてくる謎の言葉だ。
- 
- p. 56